慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	上代から近代における形容詞「高い」の示すことがらとその周辺
Sub Title	A semantic analysis of the Japanese adjective Takai based on the usages from the Nara to Meiji periods
Author	嶺田, 明美(Mineda, Akemi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.1 (2022. 12) ,p.194 (35)- 208 (21)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	屋名池誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0194

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

上代から近代における形容詞「高い」の示すことがらとその周辺

嶺田　明美

1. はじめに

形容詞「高い」の語義は、国立国語研究所（1972）では、他のものとの距離関係においてはじめていえる性質で、基準となる場や面からの垂直方向への延長である場合を示すことが中核的な意味であること、また、ものごとの質や価値が大きくすぐれていることを表す用法ももっていること、さらに、すぐれているという概念が弱まったり失われたりし、単にものの程度や性質が著しいことを示す用法があるとされている。このように「高い」は多義的で、比較的自由に使用される。嶺田（2015）では、「Xが高い」の近代から現代にかけてのXにどのような語があるかを新聞の用例からまとめ、Xが程度を示す事例が現代に向かって多くなっていることを示した。

本稿では、近代以前の「高い」で示されるものにどのようなものがあるのかについて、事例をまとめ、古代の特徴について考察したい。

2.「高い」の語義の調査方法

『日本語歴史コーパス』（以下CHJ）を中心に事例を収集した。検索ツール「中納言」でコアを対象に語彙素「高い」（短単位）として抽出し、それぞれ「高い」によってあらわされるものを分類した。判断に迷うものについては、『新編日本古典文学全集』（以下『新編』）、大塚（2006）（以下『翻刻』）、『新日本古典文学大系』（以下『体系』）を利用した。

大野(1956)は、古典作品の名詞・形容動詞・形容詞・動詞の使用頻度を調査し、形容詞の使用頻度は上代が約4%、中古が約7%、中世が約6%であることを示されている。古代では形容詞自体の使用頻度が低いということであり、CHJで得られる古代の形容詞「高い」の用例もあまり多くはないといえる。時代ごとの量がなるべく不均衡にならないように50例を目安に抽出し、50例を超える場合は、50例程度をランダムに抽出した。検索対象は、表1のジャンルと作品の通りである。「洒落本」は、調子を整えるための使用例や掛詞的な要素が非常に多く、本稿での調査対象からは外した。

3.語義の分類基準

CHJで得られた「高い」の表すことがらの数を表1にまとめた。掛詞で複数の語義を持つものは、それぞれにカウントした。次のような例である。

・音たかや　つづみの山の　打はへて　たのしき御代と　なるぞうれしき･･･『新編』の訳では「鳴る音が高く、評判も高い鼓の山」とある。「音」と「評判」のそれぞれにカウントした。

表1　「高い」のあらわすことがら

		垂直方向への延長 空間的位置					音・声	程度					数値		その他	合計
		自然物	もの	身長	位置	場所		位	名声	気位	心象	その他	年齢	値段		
奈良	万葉集	41	1				5								3	50
	日本書紀・古事記	9	5		3	2		2	1							22
	小計	50	6		3	2	5	2	1						3	72
	割合	69%	8%		4%	3%	7%	3%	1%						4%	100%
	合計	61 (85%)					5 (7%)	3 (4%)							3 (4%)	72
平安	和歌	29	5		6		8	1	5		1		3			58
	散文	5	4	2	12	1	10	14		1			1			50
	小計	34	9	2	18	1	18	15	5	1	1		4			108
	割合	31%	8%	2%	17%	1%	17%	14%	5%	1%	1%		4%			100%
	合計	64 (59%)					18 (17%)	22 (20%)					4 (4%)			108
鎌倉・室町	日記・紀行	14	6	2	8			4	4		1		1			39
	軍記	6	8	1	8	13	3	7			1		1			48
	説話・随筆	12	4	3	6	2	9	3	4	1			4	2		50

鎌倉・室町	狂言	2	3	2		1	2	1						7	2	20
	キリシタン	4			4	9	4	2			1					24
	小計	38	21	8	26	25	18	17	8	1	3		6	9	2	181
	割合	21%	12%	4%	14%	14%	10%	9%	4%	1%	2%		3%	5%	1%	100%
	合計	118 (64%)					18 (10%)	29 (16%)					15 (8%)		2 (1%)	181
江戸	随筆・紀行	3	1		1											5
	人情本		1		1				1	1					4	8
	近松	3	3	1	3	2	8	3	6					14	7	50
	小計	6	5	1	5	2	8	3	7	1				14	11	63
	割合	10%	8%	2%	8%	3%	13%	5%	11%	2%				22%	17%	100%
	合計	19 (30%)					8 (13%)	11 (17%)					14 (22%)		11 (17%)	63
近代	雑誌	7	4	4	3	1	7	2	7			6		9		50
	小説	9	7	12	8	1	5			2	1	2		3		50
	小計	16	11	16	11	2	12	2	7	2	1	8		12		100
	割合	16%	11%	16%	6%	2%	12%	2%	7%	2%	1%	7%		12%		100%
	合計	56 (56%)					12 (12%)	20 (20%)					12 (12%)			100

分類の基準は次のとおりである。

(1)垂直方向への延長や空間的位置

「自然物」「もの」「身長」「位置」「場所」に分類した。

①自然物・・・山や波、木などの自然界にある非人工的なもの。

・あしひきの　山かも高き　巻向の　崖の小松にみ雪降り来る（万葉集・巻10・2313）　・・・山の例

・風をいたみ　沖つ白波高からし　海人の釣船　浜に帰りぬ（万葉集・巻3・294）　・・・波の例

・はるかに高き木の上に（十訓抄）・・・木の例

②もの・・・自然物以外のもの。

・烏瑟たかくあらはれて（平家）・・・『新編』注記では「烏瑟」とは仏の頭頂の隆起のこと。

・すそ軽く寄るほど塀の高ければ伸び上がり（近松）・・・塀の例

③身長・・・人の背丈。

・まづ、居丈の高く、を背長に見えがまふにさればよと胸つぶれぬ（源氏）・・・居丈（『新編』注記では「座っているときの身の高さ」のこと）

④位置・・・そのものの空間的な位置。

・月高くさし上がり（源氏）・・・月の空間的位置の例

・（首を）太刀のさきにつらぬきたかくさしあげ（平家）・・・とった首の空間的位置の例

・そのかたつぶりを取って高う飛び上がり（天草伊曾保）・・・飛び上がった結果の空間的位置の例

⑤場所・・・具体的な場所。

・岸たかくして屏風をたてたるにことならず（平家）・・・岸の例

・俊寛は高いところに走り上がって（天草平家）・・・「ところ」の例。空間的な「ところ」を示しており、「場所」に含めた。

(2)音・声

波の音や人や鳥などの声を分類した。

(3)程度

「位」「名声」「気位」「望み」に分類した。

①位・・・地位や身分、威光、神徳など。

・聖業逾高く、王風転盛なり（日本書紀）・・・威光の例。『新編』の訳では「その神聖な業はいよいよ高く」とある。威光と解釈してこれに分類した。

・高いも低いも親たる身の喜びといひ（近松）・・・身分の例。『新編』の訳では「身分の高いものも低いものも」とある。

②名声・・・名声や評判・名高いこと、噂。

・なにたかき　おば捨山も　みしかども　今夜ばかりの　月はなかりき（詞花・288）・・・名高いの例。

・音もせず　成もゆくかな　すずか山　こゆてふなのみ　たかく立つつ（後撰・1040）・・・噂の例。

③気位・・・気位や気品。

・口惜しき際の人だに心を高うこそつかふなれ（源氏）・・・『新編』の訳では「気位や矜持を高く持つ」とある。

④心象・・・望みや思い、恩、慈しみ、罪業などをまとめた。

・迷盧八万の頂より猶高い父の恩を忽ち忘るるに・・・恩の例。（山と掛けている）

⑤その他･･･明治期に特徴的な語をまとめた。

(4)数値

①年齢と②値段をまとめた。

(5)その他は、枕詞、慣用句的なもの、漢詩文の翻訳表現などを分類した。

・風高く　辺には吹けども妹がため　袖さへ濡れて　刈れる玉藻そ(万葉集･巻4･782）･･･『新編』注記に風高シは漢詩文の「風高」の翻訳語で主として秋冬の疾風にいう、とある。

・汝がやうなこしのたかひやつめはつかはれぬよ（狂言）･･･『翻刻』の注記に、態度が横柄なことで、現代では「腰が低い」はあるが「腰は高い」はなく、現代は慣用化が進んだとある。「腰が低い」の対義的な慣用表現とした。

4.各時代の特徴

「垂直方向への延長・空間的位置」を表す全体に占める割合は、上代が85%、中古が59%、中世が64%、近世が30%、近代が56%である。山崎ほか（2021）は、CHJを利用した形容詞の語義・用法データベースの構築を目的に、平安時代の形容詞５語（深い、高い、憂い、安い、恥ずかしい）の語義と活用形の頻度をまとめている。「高い」の語義については、「位置／垂直方向／音・声／評判／程度／高邁／数値／金額／高慢」に分けてその事例を数え、位置、垂直方向と程度の用法が多いことが示されている。本稿でも中古は約60%で、全体に占める割合は大きいが上代よりは小さい。

古代においては時代が下るにつれて、「垂直方向への延長・空間的位置」の用法の割合が小さくなっている。特に上代で約70%を占める「自然物」に関する割合が、中古で31%、中世で21%、近世で10%と減少している。

「万葉集」の語彙素「高い」は、全部で50件であり、その中の41例が「自然物」であった。その内訳は、「山・みね」が25例、「波・潮」が16例である。また、「自然物」のうち24例は「語幹＋み」の形であった。残る９例のうち、5例が「音・声」、１例が「もの」、３例が「その他」である。CHJの検索結果からは、上代の韻文においては、山や波を「高い」と捉える傾向が顕著であることが

わかる[1]。ただし、「自然物」については、ほとんどの時代で、「山・みね」を主な対象にしている。

上代の散文については、CHJの「続日本紀宣命」からは11例収集できたが、そのうち7例は「年齢」に関するもの、残りの４例は「天」「皇」「大命」「行」などであった。「延喜式祝詞」からは3例収集できたが、３例とも「高つ神」「高つ鳥」の「災い」を示す例であった。「宣命」および「祝詞」の事例は神に関連するもので偏りがあるため表１には含めていない。上代の散文については「Japan Knowledge」を利用し、『新編』の「古事記」「日本書紀」から「高く・高し・高か・高け・高き・高み」をキーワードにして検索した結果、表１の通り、22例が収集できた。比較するには事例が少ないが、自然物以外にも位置や場所、位なども散見され、韻文よりも「高い」と捉えるもののバリエーションがあるといえる。

中古の韻文は、八代集を対象にした。『新古今和歌集』は鎌倉時代初期の成立ではあるが、平安和歌からの撰歌であることから対象に含めた結果、55例が収集できた。「自然物」については、『万葉集』の41/50件（=82%）に対して、平安和歌では29/59件（49%）と減少している。同じ韻文であっても、「高い」と詠まれる対象が「自然物」以外にも広がっており、『万葉集』よりも語義のバリエーションがあることが分かる。

中古も中世も「垂直方向への延長・空間的位置」が約6割であるが、中世では「場所」を示す割合が増えている。「軍記」や「天草版平家」などで、人物やものの存在する場所の描写がされる次のような例が比較的多いことが影響していると考えられる。

・判官はたかき所にのぼりあがって（平家）
・たかき所には赤旗おほくうちたてたれば（平家）
・俊寛は高い所に走り上がって（天草版平家）

近世以降は、「自然物」についての描写はあまり多くはなく、「高い」の対象はほかの項目に分散されている。

人の「身長」を表す場合は、「背」のほかに

・丈高き人の常に笑はるるを言ふなりけり（源氏）

のように、「丈」が使われている。「丈」については、『日本国語大辞典（第２版)』（以下『日国』）の語誌に、本来、物の高さを指す語で、具体的に尺度の示されることが多く、「せ（背)」は、本来は「はら（腹)」に対する語で動物などの首から尻尾までの部分を指す語であったが、立っている動物では足下から「せ」までの高さを指すようになり、「たけ」と類義の語となった、とある。近代の雑誌には

・何んて丈の高い人だ事（女学雑誌）

とあるように、近代でも「丈」が「背丈」の意味で使われているが、現代日本語では「丈」は、主にものの長さや単位の意味で使われ、「長い」とも共起する。

近代の小説では人の背丈の描写が12例あり、そのうちの8例が「浮雲」で繰り返されているために、「垂直方向への延長・空間的位置」の割合が大きくなった。

「音・音声」については、どの時代でも10%~15%程度あり、時代が変わっても使われ続けていることが分かる。

「程度」は、抽象的な概念であるが、上代ではその割合が4%しかない。中古の散文では「位」を示す事例が14%を占めているために全体の合計が多くなり、「程度」の割合が中古全体で21%である。「位」よりも抽象度の高い「名声」「気位」は、中古・中世で約5%であるが、近世以降では約15%と増加している。近世は「高い」の持つ中核的意味だけでなく、その用法がより拡大し始めた時期と考えられる。

「心象」も抽象度が高い用法であるが、中古・中世では4例ある。ただし、4例のうち3例は、その心象を山にたとえて表しており、「高い」自体が比喩ではなく独立して抽象度の高い語と共起することはあまりないようである。

・世の人のをよばぬ物はふじのねの雲ゐにたかき思ひなりけり（拾遺・891）･･･「ふじのねの雲ゐ」にたとえた例

・その恩迷盧八万の頂よりも高く（とはず）･･･「迷盧八万の頂」にたとえた例

・遥嶺の社壇をめぐる、おのづから大慈の高く峙てるを彰し（平家）･･･「遥嶺の社壇」にたとえた例

・み山の松が枝とかるる事なくすべらぎのちよもやち千世もつかへんとたかきたのみをかくれぬのしたよりねざすあやめ草（拾遺・572）･･･この１例は比喩的で

はなく、「たのみ」が「高い」ととらえられる。

「程度」の「その他」とした語は、明治期の抽象的な意味を持つ漢語が「高い」と共起する例と「香り」である。漢語を『日国』の出典例を参考に古い順に示すと次のとおりである（　）は出典と成立年。

技倆（「四河入海」『日国』では17世紀前）、格式（「わらんべ草」1660）意想（「童子問」1691～1707）、識力（蛻巌先生答問書1751～64か）、程度（「舎密開宗」1837～47）、理想（「利学」1877）、虚栄心（「地獄の花」1902）

明治期には西洋から新しい概念が入ったことにより漢語が増えたが、明治年間に初出と考えられる語は「理想」「虚栄心」だけで、そのほかの漢語は明治期以前も存在しているが「高い」とは共起していない。嶺田（2015）で示したように、「高さの程度」としてあらわされる漢語（たとえば、「需要」「人気」など）は現代に向かって「高い」と共起される事例が増えており、その傾向は明治期から始まっていると言えそうである。

「数値」のうち、「値段」については、中古まではこの用法はなく「宇治拾遺物語（1210年代成立）」から用例がある。

・舎人も（あこやの玉：真珠を）高く買ひたるにやと思ひけれども（宇治拾遺）

・さては（あこやの玉の）価高きものにやあらんと（宇治拾遺）

『日国』の「高い」のブランチ「金のかかるさまである。高価である。」では「玉塵抄(1563年成立)」の例が最初にあり、「宇治拾遺」の事例は比較的古いと言えよう。

5.「高い」の対義語「低い」について

「高い」でしめされるものについて、古代からの使用実態は把握できたが、対義語の「低い」と、どのような対応関係があるだろうか。形容詞「低い」は、北原（1968）では、中古以前には存在しておらず、その成立は13･14世紀ごろで「ヒキナリ」（ヒキナリは、それまでは「微弱な存在」と述べられている）から生じた「ヒキシ」であると論じられている。中古以前の「高い」の対義語としては「ミジカシ」「アサシ」などであり、また「ミジカシ」の語義的意味領域が現代語

よりも広いとも述べられている。「ヒキシ」から「ヒクシ」「ヒクイ」への変化については、北原（1968）、来田（1999）で論じられている。つまり、「高い」の対義的意味としての「低い」は、鎌倉室町期以降の事例の対応関係を見ることになる。

CHJで上代〜近世の「洒落本」を除くコアデータすべてを対象に、語彙素「低い」で検索した結果と、近代の雑誌と小説から検索した中からランダムに50例を抽出した結果とを表２にまとめた[2]。

表２　「低い」のあらわすもの

		垂直方向への延長 空間的位置					音・声	程度					合計
		自然物	もの	身長	位置	場所		位	値段	価値才能	程度度合	その他	
上代	続日本紀				1								1
中古													
中世	軍記			1	1								2
	説話		1		1								2
	狂言		1	3			1						2
	キリシタン			1									1
近世	人情本		1										1
	近松			1			2	2					5
小計			3	6	3		3	2					17
合計		12					3	2					
近代	雑誌	2	3	4	9	1	2	1	6	2	6	1	37
	小説	2	6	4	6	2	8				1		29
小計		4	9	8	15	3	10	1	6	2	7	1	66
合計		39					10	16				1	

形容詞「低い」が現れる時代が中世以降であることや、「値段」には「安い」、「位」には「卑しい」が使われることを含めても、「低い」の出現度合は低い。「高い」では中世で20％あった「自然物」や、14％あった「場所」、「位」以外の「程度」はCHJからは１例も検索できなかった。特に古代における人々の関心が「低い」ことに向き難いことがうかがえる。近代においても、「高い」よりも出現度合は低い。ただし、近代では、「高い」では現れなかった「価値・才能」「程度・度合」などの抽象的な漢語が現れた。

6.形容詞の対義関係

5で見たように、「低い」よりも「高い」の使用頻度が高く、「高い」ことに意識が向いていることが分かる。ここではほかの対義関係についても見たい。

CHJを使用して、上代から近世までの全資料を対象にそれぞれの語を語彙素として検索（短単位）した結果を表３にまとめた。

表３　対義関係

語彙素	実数		割合	語彙素	実数		割合	実数合計
高い	5234		82%	低い	1116		18%	6350
—				安い（廉価）	26		—	—
—				細い（声）	9		—	—
—				短い	5		—	—
—				卑しい	201		—	—
長い	919		85%	短い	156		15%	1075
多い（形容詞）	147			少ない	251			
多い（文語形容詞）	1684	1832	88%			256	12%	
多げ	1			少なげ	5			2088
大きい	42			小さい	360			
大き（形状詞）	1013							
		1175	75%			383	25%	1558
大きやか	20			小さやか	10			
大きな（連体詞）	100			小さな	13			
深い	1700		87%	浅い	265		13%	1965
重い	424		78%	軽い	117		22%	541
強い（つよい）	368			弱い	156			
		421	73%			158	27%	579
強い（こわい）	53			た弱い	2			
粗い	15		68%	細かい	7		32%	22
広い	308		66%	狭い	157		34%	465
濃い	201		51%	薄い	190		49%	391
遠い	690		37%	近い	1196		63%	1886

太い	75		37%	細い	127		63%	202
新しい	142		29%	古い	347		71%	489

それぞれの語は、出現時期が異なり、また品詞についても時代によって取り扱いに違いがあるが、本稿では対義的な使用頻度を見たいため、表を作成するにあたってはCHJの語彙素と品詞に従って全体をまとめた。

「高い」の対義語は種々ある。「安い」は廉価であることの意味を取り出した。廉価であることの意味はCHJでは「狂言」から以降の例しかない。『日国』の用例では、「賤」をあてて廉価の意味（「蘇悉地羯羅経延喜九年点」：909年）をあげているが、和文での使用は「虎明狂言」の例からである。使用される時代に制限があることもあって用例数は少ない。「細い」は「声が細い」を取り出した。「短い」「浅い」については、北原（1968）の述べるように「高い」の対義的な語としての存在も考えられる。それぞれの語をキーとして、前方共起条件をキーから５語以内に語彙素「高い」を加えて検索した結果、「短い」は次のように「高い」と対照されるような事例が５件あり、これは「高い」の対義語として区別した。「浅い」はなかった。

・三尺の几帳を立てたるに、帽額のしもただすこしぞある、外に立てる人と、内にゐたる人と物言ふが、顔のもとにいとよく当りたるこそをかしけれ。たけの高く、短からむ人などやいかがあらむ。（枕草子）

「卑しい」は「粗野」の語義も含まれている。

「多い」と「大きい」については、山内（1999）で、「大きい」の文語形として「大きし」が考えられるが存在せず、「大」「多」が未分化の「おほ」があり、形容詞「多し」、形容動詞「大きなり」へと分化。「大」「小」の関係では、「大」の対義語「小」は「ちひさし」であった。語形・活用形を整えようとして「ちいさい」に引き寄せられて「おおきい」が発生、「おおきなり」に引き寄せられて「ちいさな」が後に発生。室町時代は「おほきなり」の系列が中心的で、その形容詞化が少しずつ姿をみせたところであったと述べられている。CHJでは「多い」（形容詞）は室町時代から出現している。「大きい」は42例あるが、うち１例は「文語形容詞」で鎌倉時代の事例、そのほかの41例は「形容詞」で室町～江戸時代の事例である。奈良時代の「マネシ」15例は除いた。「多げ」「少なげ」は文字列検索を利用した。

現代語では、程度形容詞の対義関係にあるものは、おおよそ程度の大きいほうの使用頻度が高いことが、久田（1980）・村木（1987）などで示されている。久田（1980）は、1987年版中学校理科教科書を対象に、村木（1987）は国立国語研究所の語彙調査（『雑誌90種類』『中学校教科書』『高校教科書』）を対象に調査を行っている。両氏の調査結果は次の通りで、両氏が共通して調査している語は結果が一致している。

高い＞低い、長い＞短い、多い＞少ない、大きい＞小さい、深い＞浅い、重い＞軽い（久）、

強い＞弱い（久）、広い＞狭い（久）、新しい＞古い（村）、

粗い＜細かい（久）、太い＜細い、濃い＜薄い（久）、遠い＜近い

※左項が程度の大、右項が程度の小を示す。（久）は久田（1980）のみ、（村）は村木（1987）のみで調査されている語を表す。

古代の対義関係と比較すると結果が異なるのは、「粗い/細かい」「新しい/古い」である。「粗い/細かい」は、CHJの事例があまり多くなく、用例数を増やして見る必要がある。「新しい/古い」は古代の感覚においては、「新しい」ことよりも「古い」ことに注意を向けている点が現代との大きな違いである。「濃い/薄い」は、久田（1980）では「濃い27件：薄い144件」で明らかな差があるが、古代では、「濃い51％：薄い49％」で差がない。調査対象の資料の性質の違いもあるが、現代と古代の違いといえよう。

全体としては、「高い」「長い」「大きい（多い）」「深い」「重い」「強い」「広い」など、次元的な項目については、程度が「大」のほうに、価値やおもしろさを認めているといえる。しかし、たとえば、現代語で、あるものの高さを問う際には「どれぐらい｛高い/＊低い｝か」と「高い」を使用するため使用率が高くなる可能性がある。一方で、「その食パンはどれぐらい｛厚い／薄い｝か」のような文は、価値や焦点をどちら認めるか、その認識の違いで使用する語も変わる。本稿は、それらを踏まえての調査ではないため、古代語においても全体が程度「大」のほうに使用率が傾く傾向がある。この点は、今後の課題である。

7. まとめ

古代における「高い」の対象とするものについては、時代が下るにつれてバリエーションが豊かになり、また「高い」の語義も拡大している。特に、抽象的な概念を示す用法の広がりは特徴的であるといえる。形容詞の対義関係にある語の使用については、現代とほぼ同じような感覚であること、ただし「新/古」の感覚の違いがあることが指摘できた。

本稿では、「高い」以外の形容詞の対象については触れられなかったため、今後の課題としたい。

【注】

1　CHJでは、「万葉集」の例は全体でも50例と少ないため、「自然物」に傾向が傾いた可能性もある。「Japan Knowledge」を利用し、『新編』の「万葉集」から「高」の事例を検索し、CHJの用例の分類で「その他」としたものは除き、形容詞を抜き出して活用形ごとに整理した。その数は表4のとおりである。全体でも61例しかなく(そのうちの50例はCHJの結果と重なる)、CHJの結果と大きな違いはないが、「自然物」の例が11件、「もの」の例が１件、「名」の例が２件、それぞれ追加できた。CHJでは検索できなかった「高に」の例は４件あり、いずれも「いや高に山を越え来ぬ（巻1・131)」のような「山」に関連する用法であった。自然物に関連する捉え方が多いことに変わりはなかった。

表４に示した形容詞以外にも以下のような語があったが、対象外とした。

表４

	自然物	もの	音	名	合計
高く	12	2			14
高し	3		4	1	8
高か	2				2
高き	5		1	1	6
高け	1				1
高み	25				25
高に	4				4
合計	52	2	5	2	61

複合語「高知る（10例)」「高飛ぶ(1例)」「高敷く（2例)：『新編』の注釈では高知ルと太敷クの混淆形とある」「高山（16例)」「高嶺（９例)」「高日（1例)」「高名（1例)」「高坏(1例)」

副詞「高々（9例)：『新編』の注釈では、人の来訪を待ち望む気持ちを表す副詞とある」

枕詞「高照らす（7例)」「高光(8例)」

表4の数に関連して、活用の種類とその数については、村田・前川（2021）はCHJを使って、奈良から昭和までの各時代に連用形・終止形・連体形が認められるヨイ・タカイ・ウレシイについて、この三活用形の出現率を分析している。それによると奈良時代のタカイの活用形は、連用形46.7%、終止形20.0%、連体形46.7%であり（合計が100%を超えるがこの理由は不明）、活用形の分布に差があることが指摘されている。表４に示した数とは結果が異なるが、本稿では、これについては触れない。

2　「低い」の例が上代に1例ある「天高けども卑きに聴く物そと詔りたまふ天皇が御命を衆諸聞き食へと宣りたまふ（続日本紀）」（「天高毛止卑聴物曾止」（『大系　続日本紀5』））。これをヒキと読むかについては、北原（1968）を借りれば「ミジカキ」（現代の「低い」の意味）とも読む可能性があることを付記しておく。

【参考文献】

大野晋(1956)「基礎語彙に関する二三の研究 －日本の古典文学作品に於ける－」国語学会『国語学』24　武蔵野書院

北原保雄「形容詞『ヒキシ』攷　－形容動詞『ヒキナリ』の確認－」『国語国文』37-5　京都大学国文学会

来田隆「ヒキイからヒクイへ」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』18　和泉書院

国立国語研究所（1972）『国立国語研究所報告44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

久田隆基（1980）「中学校理科教科書における程度や量の強弱・大小などを表すことばの使われ方」日本教科教育学会誌7-3　日本教科教育学会

嶺田明美(2015)「形容詞『高い』の使用実態について　－『強い』『大きい』などとのゆれの可能性の指摘―」『学苑』893　昭和女子大学

村木新次郎（1987）「第3章　意味の体系」北原保雄監修『朝倉日本語講座４　語彙・意味』朝倉書店

村田菜穂子・前川武「平安時代から大正時代にかけての形容詞の活用形分布とその周辺」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』40　和泉書院

山内洋一洋（1999）「『おほ』（大・多）の変遷　―『大きなり』『多し』『多かり』『大きい』をつないで―　国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』18　和泉書院

山崎誠・村田菜穂子・前川武・村山実和子（2021）「形容詞の通時的語義・用法データベースの作成」『人文科学とコンピュータシンポジウム2021論文集』　情報処理学会

【参考資料】

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』ﾃﾞｰﾀﾊﾞｰｼﾞｮﾝ2022.3

（https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search）
大塚光信（2006）『大蔵虎明能狂言集 翻刻註解 上・下』清文堂
『新編日本古典文学全集』小学館　JapanKnowledge（https://japanknowledge-com.）を利用
『新日本古典文学大系』岩波書店
『日本国語大辞典』第2版　小学館